序章

2023/1/9　追加・修正 by OHYABU

（一）

地球に依存する知的生命体〝人類〟。
彼らが考えた〝時空〟という物理法則。
それだけでははかりきれないのが、〝宇宙〟である。

見かけはひとつに見える恒星も、その一定数は、ペアかそれ以上で動く連星（れんせい）である。
見かけはひとつに見える宇宙も、じつは複数、それも多次元に存在しているかもしれない。それらは恒星と同じように、ペアかそれ以上で次元を超えて連動し合っているかもしれない。
たとえぴっちり結び合っていなくとも、一部が結び合っているということもありうるだろう。

人類が住む銀河系宇宙にも、連動し合う別の宇宙が、ひとつあるいは複数存在しているかもしれない。
人類が住む領域である太陽系も、並行宇宙――つまり別次元の宇宙――に住む別の知的生命体の生息領域と、何らかの形で連動し合っているかもしれない。
たとえば、時空を超えた通路であるワームホールがどこかに存在するとしよう。それが時につながり時にふさがりつつ、なんらかの形でそれぞれの知的生命体に影響を与え続けているとすれば……。

太陽系と**ピネロンゾーン**、地球と**ピネロン星**との関係は、まさにそうとしか考えられないものであった。
恒星**ソルド・ピネロン**の一惑星であるピネロン星。そこに住む知的生命体は、地球に住む人類そっくり、というか、ＤＮＡがほぼ一致する、ほぼ同じ人類（ホモ・サピエンス）であった。

太陽系とピネロンゾーンとの物理的距離は、いまだ解明しきれていない。しかし、地球で人類の文明が始まった頃までは、確実に連動があったとみられている。

それが何らかの理由で、互いをつないでいたワームホールがふさがり、以後それぞれ独自に進化していったのであろう。
ただ結果としては、ほぼ同じような進化をとげていた。

起源を同じくする生命体が、たとえ物理的接触はなくともほぼ同じ環境下でなら、結果として同じような進化をとげることはある。
種やグループなどが異なる生物間で起こる〝収斂（しゅうれん）進化〟と呼ばれるものは、まさにそれにあたる。地球上でなら、オーストラリア大陸や南アメリカ大陸での有袋類と、それ以外の地域での有胎盤類との間に、こうした関係にあるものが数多くいる。
たとえば、有袋類のフクロモモンガと有胎盤類のモモンガ。二種は似ている。
同時に二種の違いも明確ではあるが。
それでも、宇宙規模での生物全体から見れば、ほんのわずかな環境の違いによって生じた、ほんのわずかな違いにすぎないであろう。

種が異なる生物の間でもそうであるから、ましてや同じ種の間でなら。
同じ知的生命体どうしなら、それぞれに産み出すもの――文明や文化――なども、ほぼ同レベル・ほぼ同じようなものになるかもしれない。
地球に住む人類と、ピネロン星に住む人類とが、まさにそうであったように。

はるか昔に分岐した同じ人類。
そんな二つの人類が、長い時を経て、再び連動し合うこととなる。

きっかけは、地球への彗星の衝突。太平洋への落下。
そこから生じた凄まじいエネルギーが、ふさがっていたワームホールをこじあけたのだった。

（二）

のちに〈**逸失の日**〉と呼ばれることになった、その日。
地球上にいた人々にとっては――人類を含めた多大な命とともに、自然も人工物もその多くが失われ破壊され、ほぼすべての電子データが消滅し、記されていた人類の記録がほぼすべて失われてしまった日。
地球外にいた人々にとっては――地球に依存していたライフラインがすべて破壊され、

それが原因で多くの人命が失われ、運よく生き残れた者たちも、地球へ帰還するまでのさまざまな困難の中のなかで、さらに多くが命を落としてしまうことを運命づけられてしまった日。

……とはいえ、たったそれだけの被害ですんだ、ともいえた。
地球壊滅、人類滅亡が当然の事態なのに、一時的な磁気嵐と大気変動と大津波だけですんだのだ。一見物理的被害を受けなかった地域も多かった。
信じられないほどに、ありえないほどに、軽度な被害。
専門家たちは逆に頭を抱え、自分たちが生き残った幸運にさえも恐怖を感じた。
これから何が起こるのか。消えた膨大なエネルギーはどこへ行ったのか、と。
その答えはやがて解明される。突如真空管ラジオから発せられた、正体不明の音声によって。

強力な磁気嵐の影響で、地球上のコンピュータなどの機械は、ほぼすべて基盤をやられたうえ、動力源となる電力を失ったことで、ただのガラクタと化してしまった。
やむなく、乾電池で動く真空管ラジオなどの原始的な機器が、完全破壊をまぬがれた博物館などからかき集められ、しばらくの間人々をつなぐ情報手段となった。
そうした臨時的な情報ネットワークの中から、その異質な音声は発せられた。
何度も何度も発せられるその音声が、地球上には存在しない言語のものだということは比較的早くにわかったものの、別次元の宇宙からのものといったことまで解明できるには、コンピュータシステムの本格的な回復を待たなくてはいけなかった。

コンピュータシステムの回復は、**引揚者**たち（地球外から戻ってくる者たち）の一部が持ち帰ってくる無傷のコンピュータによって、少しずつ進められていった。その間にも、インフラの回復への努力はたゆみなくなされ、送電が可能となる地域も少しずつ出てきた。食糧生産の再開や、商業ネットワークの再構築もはじめられていった。
国連の機能がなんとか維持されていたことが幸いしたといえる。
ただ、国家や民族や宗教といった従来の境界は複雑化し、国連がいくら努力しても混沌と混乱はしばらくおさまることはなかった。
そんな時に、まさかの宇宙人からの交信である。

しかし、さほどパニックは起こらなかった。
というか、パニックを起こせるだけの情報もなく、余力も余裕もなかった。それほどまでに当時の、特にごく一般的な地球人たちは、疲弊しきっていたのだ。彼らのなかには、

今日食べるパンを得るためなら、そういうあらたな展開があってもいいと期待する者さえいた。
交信をはかってきたピネロン人たちも、じつはあとで述べるような複雑な状況に置かれていたために、あらたな地とのあらたな展開を期待していた。
地球人とピネロン人との、有史以来の、ある意味幸運なファーストコンタクトだったと言ってもよかった。

（三）

言語の翻訳が進むにつれ、徐々に地球人の間から警戒感は薄らいだ。
やがて、地球の窮状を知ったピネロン星から、救いの手が差し伸べられた。
それは地球人にとっては驚くべきものであった。
ある一定の電波にのせて、ラジオやコンピュータの出力機器に向けて届けられたものは、ただ透明。最初は重力のみが検出されるだけだったが、やがてその重力に応じて周辺の原子や分子を引っつけ、うっすらと実体を現した。
くっつけた原子や分子の内容によって、あらわれる状態はまちまち。共通しているのは、そこに電磁気力を加えることで、原子や分子どうしの化学反応を起こさせることが可能となり、実在的構造物を作り出せることだった。
そうした科学反応を起こさせる前に、光――つまり「光子」を使えば、分解したり切りとったりすることも可能だった。

その驚くべき〝重力の糊〟は、地球語で「**エキゾチック・マター**」と名付けられた。
最初は調整が困難であったが、しだいに扱いに慣れると、望む素材を作り出せるようになっていった。おもに建築素材をつくりだすのと、各地で放置・拡散されていた危険な放射性物質などを封印するのに使われることとなり、このことが地球の復興を飛躍的に早めることになった。
ピネロン星へは見返りとして、おもに地球の鉱物資源が送られた。手法としては、鉱物から分解した原子や分子を、ナノレベルまで細分化させた複数のエキゾチック・マターにくっつけ、それを〝原子素材〟として電波に乗せて送り届けていった。

この時、地球側はまったく知らなかった。ピネロン側の事情を。
自分たちが交渉している相手が、じつはピネロン星の主流派勢力ではなかったことを！
豊かな原子資源と、大被害を受けても多様性が保たれていた地球の奥深い文化は、映像や音声を通じてピネロン星の人々に伝えられ、星全体を染めるほどの勢いで広がった。

そのことがピネロン社会に大変動と大混乱を引き起こし、のちの災いの火種のひとつになることを、ピネロン側はもちろん地球側も、その時にはまだ知るよしもなかった。

ファーストコンタクトから、地球とピネロン星との間での直接的な人的交流が実現するまでには、長い年月がかかった。

互いを結ぶワームホールの位置の確定や安定化に加え、専用の宇宙船建造など、具体的な通行手段開発に時間が必要だったこともあるが、ある一定期間ピネロン星で起きていた混乱も原因だった。

電波を通じての間接交流は変わらず続けられていたために、地球側はピネロン星のただならぬ状態になんとなく気づいてはいたものの、あえてそのことに触れようとはしなかった。

じつは深刻な「内戦」状態であったことを知ったのは、だいぶ先、直接的な人的交流が実現してからであった。

ピネロン星はある時、混乱がおさまったとして正式に「ピネロン国」を宣言した。地球が「地球国」を宣言したのとほぼ同時期であった。

以後両国とも、人的交流実現に向けてのプロジェクトにまい進した。

やがて地球のパイロットがひとり、実際にピネロン星へと旅立った。

そこから、直接的な人的交流がはじまり、あらたな歴史が生まれることとなった。